

～冬の猿の餌場について～

埼玉県農林総合研究センター

鳥獣害防除担当

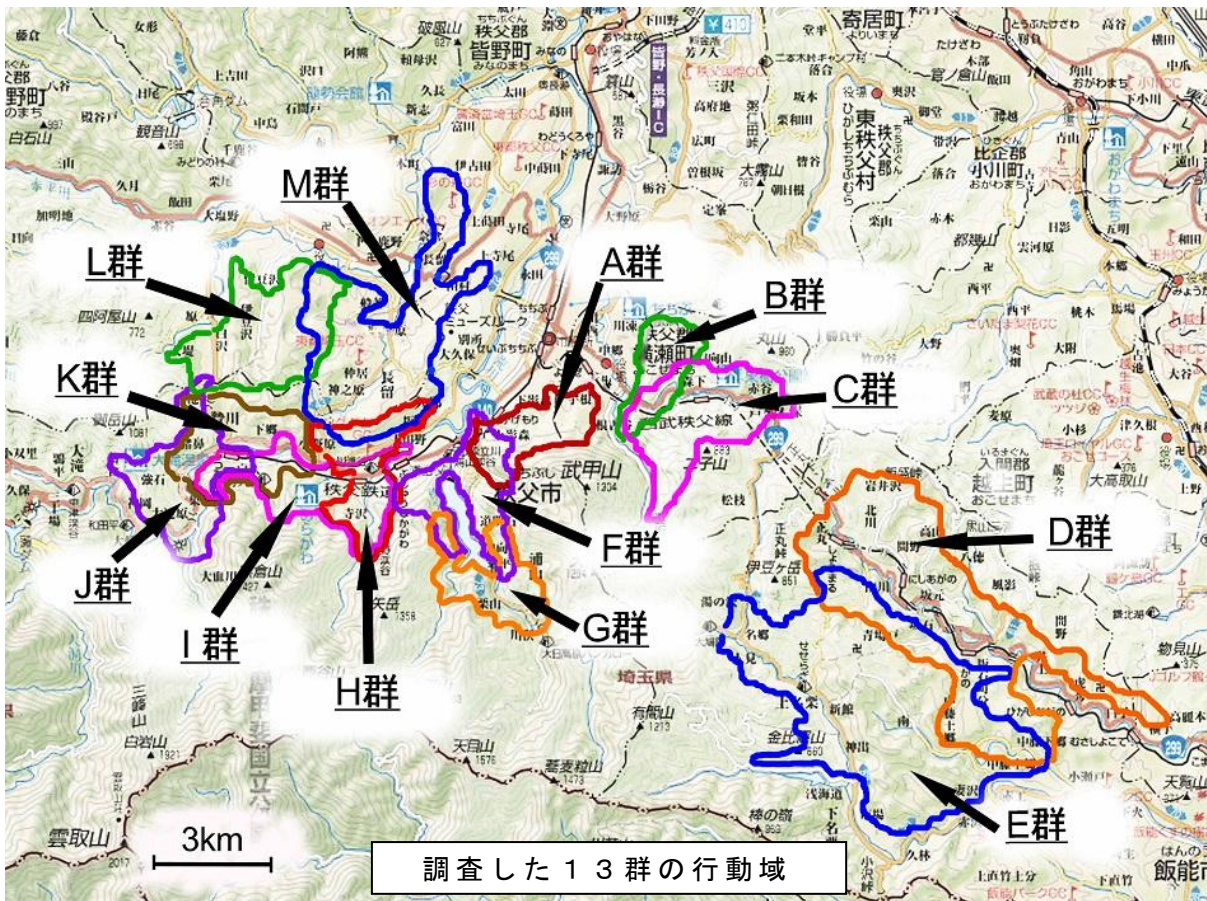
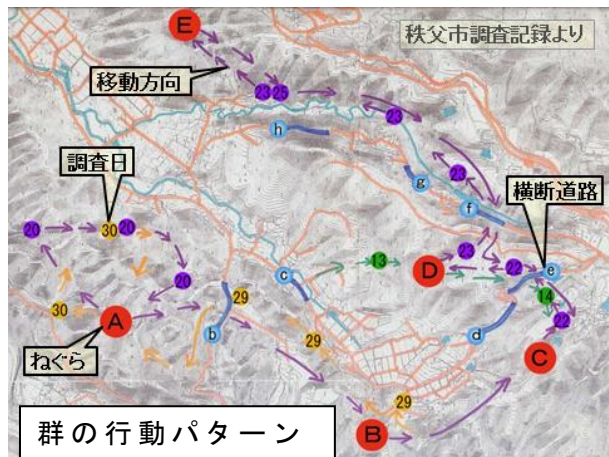
(1) ねらい

中山間地域では、ニホンザルによる農作物被害が多発し、観光農業をはじめとする地域の農業に深刻な影響を与えています。各地域で有害鳥獣捕獲による個体管理や追い払いなどの対策が行われていますが、被害は減少していません。これは、集落を餌場とすることにより栄養状態が良くなり、各群の個体数が維持できていることが要因であると考えられます。野生動物は冬期の餌量が個体数の増減に影響することから、ニホンザルの冬期の餌に着目し、各群の行動域内にある餌に対する冬期の依存度を調査しました。

(2) 研究内容

ア 生態・行動域調査

ニホンザルの生活と行動域を知るため、発信器を装着した個体による追跡調査を行いました。その結果、季節や餌の種類によって行動パターンを決定し、集落を餌場として頻繁に利用していること、また、冬期は集落への依存度が高いことがわかりました（表1）。



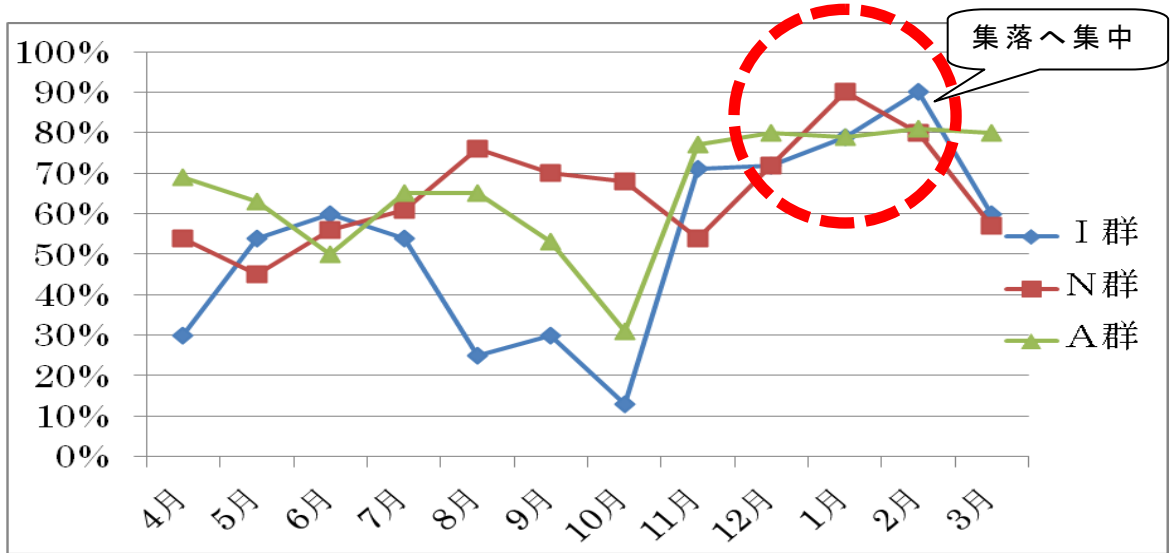


表1 各群の集落依存度

イ 集落周辺の餌調査

集落依存が何によるものかを検証するため、目視により集落周辺における被害状況、食痕、糞などの情報を基に調査を行いました。冬期の餌として着目したユズは、11月上旬～3月上旬まで利用し、特に、餌が最も少なくなる12月中旬～2月下旬に依存度が高いことがわかりました(図1)。



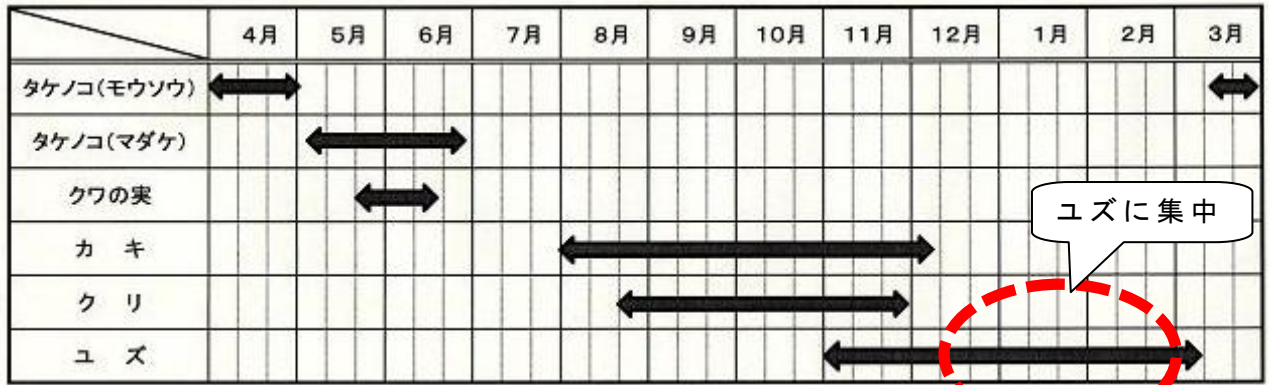


図1 集落周辺で餌となっていたもの

ウ 行動域内のユズ植栽地の調査

ユズへの依存度が高いことから、各群の行動域内に植栽されているユズの調査を行いました。この結果、ユズの植栽位置と群の滞在地点が一致しました（図2）。各地域で、多数の放任ユズや収穫されていても高木化や冬至を過ぎた後のユズが、春先まで木に残されていることがわかりました。



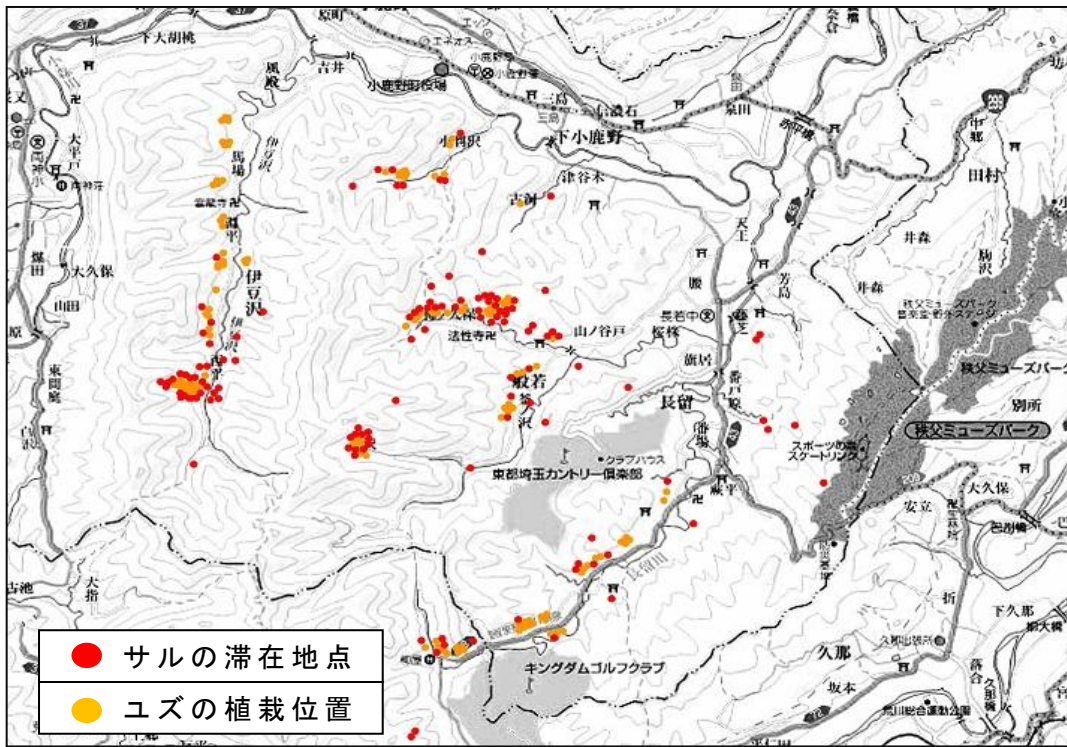


図2 ユズの植栽位置と群の滞在地点

(3) 今後の見通し

農作物被害の減少を目指して、効率的な被害対策を進めていくためには、冬期の栄養源につながる豊富な餌を無くし、集落へ依存させないことが必要です。研修会等で放任ユズの伐採を提案し、一部地域では取組みが始まっています(図3)。また、高木化したユズを低木化することで残さず収穫できる方法も提案し、今後地域と連携した対策を推進していきます。

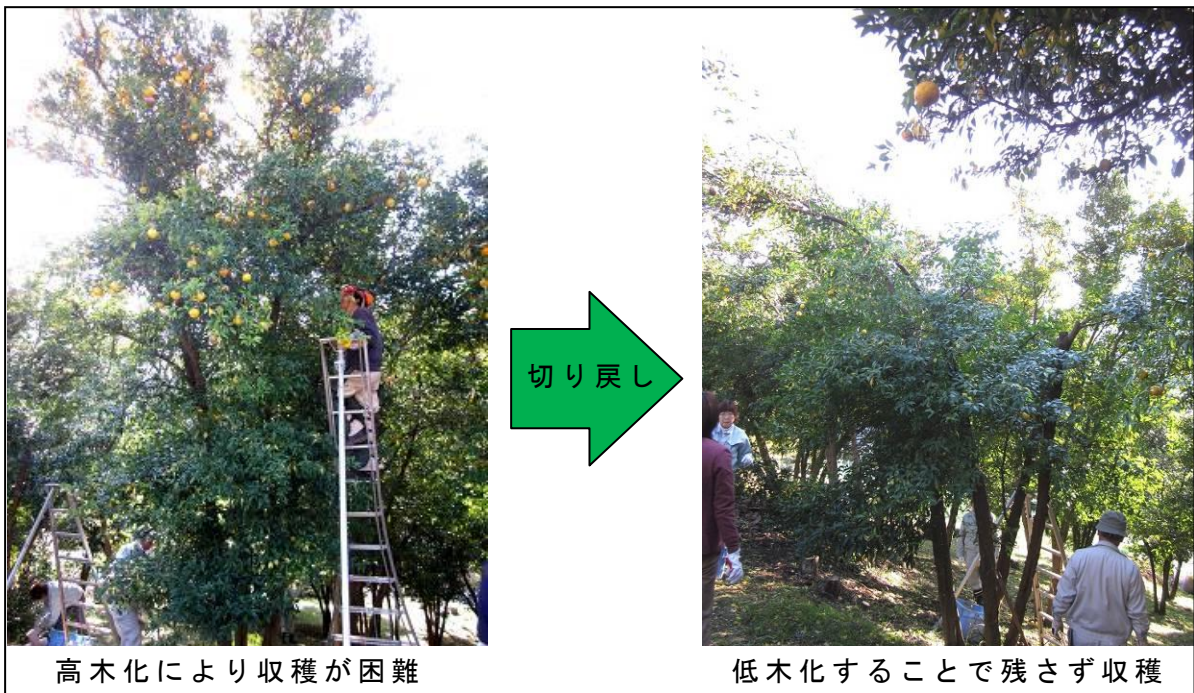


図3 高木化したユズの伐採